

〈講演 3〉

わが校のいじめ事前防止教育

足立区立辰沼小学校長 仲野 繁

こんばんは。今紹介にあずかりました仲野繁と申します。よろしくお願いします。具体的に本校でやっているいじめ防止活動の説明をいたします。

これは「辰ピー」といいまして、本校は辰沼小学校というのですが、子どもたちが辰沼小学校を幸せに楽しくしようということで、130 人ぐらいの子どもが応募してくれて、つくったキャラクターです。私の体の大きさのゆるキャラを家庭科の先生と図工の先生がつくってくれました。昨日は辰ピーのテーマソングが完成したので、歌の発表会。そこまでいっています。なぜこういうことをやっているかということをお話したいと思います。

私はいじめ防止教育は命を守る教育だと思っていますのです。ここに学校の先生がいらっしゃるかもしれませんが、いじめ問題、特にいじめ防止に本気に取り組んでいない学校というのは、子どもの命をどうお考えなのか。避難訓練というのはよくやりますよね。命を守る。だけど、いじめだって人の命が懸かっているのです。ならば、避難訓練をやるように、いじめだって防止教育をやるべきじゃないかと思っていますのです。だけど、なかなかこれが届かないので、きょうこの場に来たわけ。この考えを理解されているのは尾木先生なので、いろいろな場面でアドバイスやご指導を受けています。

そもそも、このいじめ防止教育をなぜ始めたかということ、先ほども話が出ていましたが、2011 年の、例の大津のいじめ事件。それが発覚したのが 2012 年です。その夏休みの終わりの頃に、校長室に児童会の子どもたちを呼

んで、「あの事件、どう思う？」と聞きました。そうしたら、大人はすぐいじめをするな、あったら解決するよと言うけれども、僕たち子どもが望んでいるのは、いじめが起きない学校なんだと。なぜならば、いくら解決したよと言ったって、自分をいじめた相手が教室にいたのでは怖くて教室に戻れない。不登校、引きこもり、最悪は自死です。

死んだ後に対策を練ってどうするんですか。帰ってこないでしょう。方法はただ 1 つですよ。そういう事態に陥らないように、未然防止にもっと力を注ぐ。

私自身もずっと中学校で生活指導をやっていました。ただ、やはり反省してみると大人目線なのです。大人がなんとかしてやる。アンケートを取る。子どもの気持ちを探る。それは大人でしょう。いじめの兆候を発見しろ。といって、細かいリストをもらって、こういうことがあったらいじめの兆候ですよ。だけど、いじめが起きた後にアンケート調査をやられたって手遅れなケースがあるのです。

なぜこう思い立ったかということ、東北大学の名誉教授に松永先生という方がいらっしゃいます。お医者さんです。その方が、深刻ないじめで病院に来た子の脳を CT や MRA で調べたら、大脳の扁桃核に穴が空いている。傷がついている。そうすると鬱状態、統合失調症を引き起こす。結論から言うと、いじめは脳を破壊する犯罪行為だとおっしゃっているのです。

脳に穴が空いた後にどうするのですか。どういう対応をするのですか。防止しかないので。子どもたちも防止してくれ、起きない

学校をつくってくれと言っているのです。そうしたら、やるしかないじゃないですか。ただ、ここにも書いてあります。私自身も発生後の対応や生活指導をやってきました。だけど、これでは手遅れな場合があるのです。

それから、大人が気づきなさいと。先ほどの川崎の事件でもありましたけど、なぜ気がつかなかったのか。もちろん気づくのは大事なことです。だけど、人の気持ちをどこまで読めるかという場面があったときに、本当に読み切れるのか、本当に気づけるのかということです。やはり限界があります。

それから、やはり学校というのは道德教育をはじめ、心の教育が中心なので、今ひとつ防止力が弱い場合があります。

われわれも道德は一生懸命やっています。やはり心は大事だと思っています。しかし、例えばこういう指導をしませんか。「自分がされて嫌なことは、人にもするな」。だけど、いじめの定義は感じ方です。「僕は平気だけど、あの人は嫌かもしれない」ということまで考えなければ、本当の意味ではいじめは防げない。でも、それは難しい。不可能じゃないですか。人の感じ方をどこまで読み切れるか。もちろん全くゼロではないです。だけど、本当に 100%読み切れるのか。これは難しいものがあります。

それから、傍観者になるな。見て見ぬ振りをするな。だけど、いじめが起こっている現場で「やめろ」と言ったら、下手をすれば次の標的は自分なのです。下手をすれば命懸けなのです。命が懸かっていることを「傍観者になるな」と軽々しく言うのは、無責任ではないかと思うのです。傍観者になるなど言うのだったら、傍観者にならなくても済むような環境をつくってから言いなさい。大人だって、勤めている会社の不正を見つけたときに、クビを覚悟で告発できる大人が何人いるかです。難しいんじゃないですか。それをなぜ子どもに「傍観者になるな」と軽々しく言うん

だ。私も言ってきたから、私の反省です。

人間というのは、正しいと思ったり、考えていることを実践するかどうかは別なのです。私もそうです。正しいと思っても、疲れているから明日にしちゃおうとか。そういうものなんです。そういうくだらないことじゃなくても、例えば数年前、踏切である男性が倒れている。それを助け起こした女性の方が、自分がひかれて亡くなってしまいました。

この話を聞いたときに、「命を省みず救った。素晴らしいな」と思うじゃないですか。私も素晴らしいと思いました。だけど「あんた、それできる？」と言われたら、簡単にできないのです。だから、人間というのは正しいと信じていることをやるかどうかはまた別だということです。いくら心の教育で正しいことを教えたって、それを実践に結びつけなければ、いじめは防げない。私はそういう指導をしてきたので、ちょっと厳しいなど。標語やスローガンをつくっても、いじめは簡単に防げないということです。

いじめは、子どもが子どもに対して行う犯罪行為であるという認識が、まだまだ不足していたのです。本当に犯罪行為ですよ。それをいじめという言葉でごまかして、軽く考えているのではないかと思いました。

私がこれまで何をやってきたかということ、こういうことをやってきました。例えば、いじめ根絶宣言とか、仲良し宣言、スローガン、標語、ポスターづくり。心の醸成ということで、あったか言葉とか、ふわふわ言葉とか、道德教育、人権教育、自己有用感等をどう育むか。本当にやってきました。

また、生徒会でもいじめフォーラムとか、いじめビデオをつくったり、劇をやってみました。大人の対応としては、当然どここの学校もやっている、カウンセラーの面接やアンケート、生活ノートなど、いろいろやってきました。それから仲間づくり。よく縦割り班とか、この指止まれをやっています。

こういうことをほとんどやってきたのです。ただ、やはり完全にはいじめを防げなかったのです。先ほどの尾木先生ではないですけども、守秘義務があるから詳しいことは言えませんが、残念ながら救えなかった命があります。

手抜きはしませんでした。だけど反省したのは、大人の目線、大人主体の対応だったのです。教育は職業分類でよくサービス業という言い方をしますが、サービス業だったら、サービスを受ける子どもが主体じゃないですか。子どもの気持ちをよく聞く。ただ、子どもはこうすればいい、ああすればいいとは思いつかないと思うのです。そこは大人が支援してあげる。子どもの気持ちを十分聞いて、それをうまく救ってやる。子どもと相談しながら、子ども目線、子ども主体の活動が大事ではないかと思いました。

人間の行動を決めるものは何か。いろいろ私もやってきて思ったのは、たしかに学校の規則、法律、ルール、それからモラルです。道徳、規範意識。それから、アーキテクチャーといいますが、環境や構造。要するに仕組みです。どういう環境なのか。特にアーキテクチャーが大事ではないかと思っています。心理学でも、人間の行動を決めるのは刺激と環境といいます。環境というのはとても大事なキーワードではないかと思っています。

私は今までやってきていない環境づくり、これにかなり特化してやったつもりです。環境とは何かというと、例えばここに書いてありますが、日本でなぜ銃による犯罪がアメリカより少ないか。いろいろな要因があるでしょう。ただ、すぐ思いつくのは、日本はなかなか銃が出回っていない。やはりそれが一番ではないかと思っています。つまり銃が出回っていないので、犯罪のしょうがない。だから、少ない。ちなみにアメリカ辺りでは銃の規制よりも、警官を増やしたほうが効き目があったというデータもあるので、またアメリカで

は違うのかなとも思います。

つまり、人間の行動というのは、心も大事だけれども、もっと大事なのは、環境、仕組み、空気と言ってもいいです。学校風土とか、それがとても大事ではないかと思いました。

そこで、私はいじめが起きにくい環境づくり。結論から言うと、加害者を生まない環境をつくること。加害者がいなければいじめは起きないのですから。加害者をいかにして生み出さないかということなのです。

ただ、いじめの指導になると、被害者目線で、被害者の気持ちを考えて行こうと思います。私もやってきたのですが、これは実は底の浅い指導になってしまいます。被害者目線に立ったら、誰だって「いじめはいけない」「自分はいじめをしないほうだ」。正義派に立ちませんか。子どもはすぐ結論を出します。違うのです。加害者の立場から始めるということは、ひょっとすると、僕だって、私だって、加害者になりえるな。これは駄目だなと。

では、どうするか。きょうは女性の方がたくさんいらっしゃいますけれども、お化粧するとき鏡を見ますよね。自分では自分の顔は見えません。鏡を使います。同じように、人間の行動というのは、自分では気がつかない。だから、仲間とともに、友達とともに生活して、お互いに「君、ちょっとやり過ぎじゃないの」というような、声の掛け合い。これが人間同士の鏡ではないかと思っています。

私は「いじめの六層構造」と呼んでいるのですが、普通は上の四層構造というのが有名です。もちろんその通りでいいと思います。ただ、私は、特に傍観者の中にも、止めたいんだけど止められないという方もいると思うのです。それから、そもそもいじめが起きたこと自体が分からなかったという無関係者。ただ、いじめ防止という観点から見たら、この四層だけではなくて、何としても防ぎたいという子ども、いじめがあること自体知らなかったという子ども、この子どもたち全員、

上から下まで六層全員が、普段からいじめが起きない学校づくりをする。やはりそこで生活する人間ですから、しなくてはいけないのではないかと考えています。無関係、知らなかったからでは済まされないということです。その学校で生活する限りはやはり普段からいじめを生まないような行動を全員ですべきではないかと考えているので、私はこの六層構造でしっかり考えて、防止者をいかに増やすかという観点での学校づくりをしなければ、これ以上防止はできないと思いました。

では、何をやってきたのかということですが、これを見てください。これは自由参加ですが、実は会に入りきらないので、これは半分です。この活動は子どもたちがつくったのですが、キッズレスキュー。子ども同士、助け合おうじゃないかと。助けると言っても、取り締りなどではありません。先ほど言いましたように、自分の行動は自分で気づかないのだから、やり過ぎたときは「ちょっとやり過ぎじゃないの」と簡単に声をかける。傍観者にならなくても済むような学校にしたかったのです。このT・K・R隊は200人います。ちょうど200番目が尾木先生なんですけど、みんなでやっています。

これだけの子がいじめ反対ということで、普段から行動していますので、うちの学校では簡単に加害者にならない。この子たちはいじめを止めたりもするのですが、先生に知らせることもします。発見することもありますので、この取り組みをやっていたら、敏感になって、いじめの認知件数が増えました。だけど、ほとんどがその日のうちに解決しています。芽が出た段階で、すぐ話し合いをして「ちょっとやり過ぎだよ」ということをやるので、結果的に長引くことはないのです。大きくなる前ですから。

T・K・R活動ができる前は、保護者も巻き込んだいじめの反省会や謝罪の会がありました。でも、T・K・Rができてからは1件もあ

りません。なぜかといったら、大きくなりようがないのです。これが会員証と名札です。誰が見てもすぐ分かるように、名札もT・K・R隊のものを使っています。

ポイントは、大人はすぐいじめがどうのこうのと言うのですが、子どもは違うのです。楽しい気持ちを増やす、やさしい気持ちを増やせば、自動的にいじめたいという気持ちが減るのではないかということなのです。これを一生懸命増やそうじゃないかというのがT・K・Rの活動の中身です。

もう1つ、傍観者にならなくて済むためには、これだけ反対している人がいるんだよというところをしっかりとみんなに見てもらおう。あえてパトロールをやっています。200人いますので、だいたい1日単純計算で40人。ただ、次の授業の準備や体育の準備があるので、だいたい20人から、多いときで30人ぐらいでやっています。

昨日、辰ピーの歌を発表したのです。T・K・Rの隊員は全員前に出てきて歌いなさいと隊長から指示が出たのですが、200人がステージに立ったので、フロアの子どもたちがびっくりしていました。「こんなにいたの」「こんなに反対する人がいるの」。もう目で見て分かるのです。

つまり正義というのは1人、2人では駄目なのです。たくさん人間が正義の行いをしているということを分からせなくては効き目がないのです。私の考えでは2割。うちは450名いるので90名、こういう活動をすればいいのかなと思うのですが、だいたいいつも200人前後なので、4割の子どもがやっています。いじめのグループというのはせいぜい1グループ5人や6人です。けんかをしてはいけなくとも、5対200でなかなかけんかできないと思うのです。だからいじめられにくい。

本気でないと駄目なので、課外活動には一切していません。自由参加・自由脱退。いつ

でも辞めていいという形でやっています。

何をやっているか。パトロール。先ほど言いました。それから辰沼しぐさ。これは後で説明します。いじめ相談箱・思いやり報告ポストというのですが、よくいじめ相談箱ってありますよね。あれも大事なんだけど、深刻ないじめを簡単に相談しますか。そこで、うちでは「こんなやさしいことをされたよ」と報告をするために、つまり箱のハードルを低くするために、これも同時に報告をやらせています。気軽に相談も、思いやり報告もできるという仕組みです。

それから T・K・R ブロードキャスティング。これは毎日の不定期の放送ですが、普通の放送ではないのです。「やあ、元気？ みんな、きょうは暑いよね」とか「夏はやっぱスイカが一番だね」なんてことをやっています。学校放送にふさわしくなく、テーマソングも私が個人的に好きなので、『ジョジョの奇妙な冒険』のテーマを使ってやっています。知らない人に言いますが、ディオという悪の化身がいて、正義のヒーローであるジョジョを描いている。正義のヒーローが T・K・R 隊員であると。私の個人的な趣味ですが、これ一応通ったのです。子どもたちが認めてくれた。「校長先生、かけたいんだけどいい？」と言ったら、「いいよ」「いいですよ」と。もう1つ『進撃の巨人』もかけたかったのですが、これは駄目と言われました。「校長先生、ちょっとそれはやり過ぎですよ。これはいけません」と子どもに言われた。

LINE トラブルについてのいじめ DVD の作成。これは何かというと、LINE がこれだけ普及しています。先ほど尾木先生のお話にもありましたが、女子高校生の平均時間 7 時間。9.7%が 15 時間。こういう時代になっています。やめろと言ったってやめられないでしょう。では、どうするか。正しい使い方を子どもたちに考えさせる、教育をするしかないということで、どんな使い方が正しい使い

方かということ、子どもたちが演技をして、それを見てみんなで考えるということです。それから、先ほどのゆるキャラの辰ピーとか、いろいろなものがあります。

それから、けん玉選手権等とありますが、これは子どもの発想です。「テレビチャンピオン」ってあるじゃないですか。あのノリでやっちゃおうと。チャンピオンベルトもちゃんとつくりました。チャンピオンですから、時には防衛戦をやるとか、子どもながらの発想で楽しくやる。

サミットは近隣の子どもたちを集めて、後でまた写真も出てくるのですが、子ども同士、意見交換。どうやったらいじめがなくなるかということ、近隣の学校の代表の子どもを集めてやりました。ちょうどそのとき尾木先生もいらして、コメントをいただき、子どもたちも大喜びで「もっとやるぞ」と決心を固めていました。こういう子ども同士の、T・K・R 隊員の活動です。

それから、フラッシュモブ。若い方はご存じかもしれませんが、街を歩いていて、いきなり踊り出す。これは昼休みに遊んでいるときに、急に踊り出す。変なことをやっているなどと思いますが、これが楽しい。

人権標語コンクール。どこでもやっていますよね。うちだってやっています。これではくならない。だけど、決心をつけるために、こういうことをやっています。いい作品は地域に出す。

これがパトロール。ちょっと映像を見てください。

〔映像上映〕

これは、これだけ反対しているんだよということを可視化させる。映像には出てきませんが、6 年生辺りはちょっと散らばって、トイレとか目立たない場所で行われていないかどうかを発見する。もし変なことがあったら、「どうしたの」「何かあったの」と声をかけることもしています。

本命はこれです。1人にしない。やはり絆。みんなでということを守るために。よく思いやりを持ちなさいと大人は言います。でも、子どもに聞いたら、思いやりを持つと言うけど、思いやりというのは、僕たちは何かをされて、何かをして、行動を通じて感じるものだから、言葉の上で思いやりを持つと言ったって持てないと。「じゃあ、どうする？」と聞いたら、全校生徒にアンケートを取って、どんなことをされたらうれしいかを調べましょうと。差があまりないのですが、こちらが第1位。「仲良ししぐさ」。小学生ですから、よく友達関係が変わるのです。昨日まで友達だった子が別な子と遊んでいて、一人ぼっちになっちゃう。そのときに、様子を見ていて、「ねえ、僕たちと遊ばない？」と声をかけられるとうれしいと言うのです。

小学生ですから、よくものを落とします。消しゴムを落とした、鉛筆を落とした、何かをどこかになくした。そのときに、一緒になって探してもらうとうれしい。辰沼小学校は実は足立区の小学校で一番校庭が広いのです。23区内でも4番目の広さです。なので、1年生、2年生はよく転ぶのです。そのときに上級生が来て、「大丈夫？」と抱えてくれて、血を止めてくれたり、保健室につれていったりしてくれるとうれしいと言うのです。これが第2位の「手伝いしぐさ」。

第3位が「挨拶しぐさ」。朝来たときに「おはよう」と言われると、無視されていない気がするからうれしいと言うのです。一人ぼっちじゃない。うちは挨拶運動もやっていません。挨拶を規則にしています。だけど、これをやっています。しかも200人隊員が率先してやっていますから、自然とやるようになっています。

規則にしていなくてよかったなと思ったのは、先日、正門のところでお母さん方とおしゃべりしていて、登校している子どもに声をかけたら、普段元気よく挨拶する子が暗い顔

をしているのです。それで、すぐ担任の先生に言って、「ちょっと話を聞いて」と。そうしたら、案の定、家で何かあったのです。これを規則や運動にしてしまうと、例えば家で虐待されていても、挨拶しろと言われるものだから、「おはようございます、校長先生」とやってしまうのです。そうしたら見逃してしまう。大事な心が見えなくなってしまうので、一切運動や活動にはしていないのです。もちろんしてもいいのです。してもいいのですが、うちは、子どもたちが率先してやってくれているので、あえて運動にしないでいいということです。

次は、尾木先生にも見ていただきましたけれど、これがそうなのです。これはもったいなくて、ときどきしか出しませんから、出たときは大騒ぎ。毎日出したら飽きてしまうので、ときどき出してあげばいいのです。盛り上がるでしょう。楽しいでしょう。「楽しかったな。よし、次はあいつを血だらけにしてやる」とはならないでしようというのが、子どもの発想なのです。大人はこんなものと思うかもしれませんが、子どもは楽しいことがあれば、いじめが減るのです

これが縄跳び選手権。これがT・K・R隊長です。200人を率いている隊長で、立派な子です。素晴らしい子です。これはけん玉選手権です。

これは、地域の子どもたちを集めてサミットを開きました。どこまでできるかなと思って、任せておいたのですが、私はこの後謝りました。「君たちを見くびっていたよ。ごめん」。素晴らしいのです。

これが美術の先生と子どもたちがつくった尾木先生の似顔絵です。とても楽しい会でした。

これがフラッシュモブです。

〔映像〕

要するに、何がよかったかということ、大勢の子が反対して、目に見える形でやっていま

すので、もう傍観者になる必要がないのです。ですから、LINE のトラブルがあったのですが、大多数の子が「あれ、いじめじゃないの」と思っていますから、すぐばれて大ごとにならずに済む。やはり LINE は見えないので、子どもたち自身が解決する力をつけないと防げないのです。

では、これでいいのかというと、誤解する人がいるのですが、子ども主体というと、大人は何もしなくていいのかということですが、そんなことはありません。思いとか、考えとか、そういうものは子どもの意見を聞く。だけど、アレンジしたり、具体的にやる能力はそこまで育っていない場合がありますので、一緒になって相談しながら作り上げる。だから、大人の支援は不可欠です。

例えば、あの DVD や CD は二千何百円するのです。私が買ったのですが（笑）。子どもは買えないじゃないですか。そういうときは大人が支援する。子どもは、アイデアはあっても、なかなか環境によってはできない場合があるので、そこは大人の出番なのです。だから、子どもに任せっきりでは駄目なのです。やはり大人が真剣に。

結論は、解決も大事ですが防止。病気だっ
てそうでしょう。腕のいい医者がいても、それはそれでいいけれども、やはり病気にならないことが一番じゃないですか。いじめも一緒。いじめ被害を受けないことが一番いい。

これらも子どもたちがつくった旗です。隊長がやっています。このポーズだけは『進撃の巨人』の「ハートを捧げよ」をやらせました（笑）。意地でもやらせようと。こんなことで、楽しく、みんなで支え合うという、子ども主体の活動をやっております。ご清聴ありがとうございました。（拍手）